

日蓮大聖人御書全集

おおたどのもとごしよ

大田殿許御書

新版
1363
ゝ
1367

おおたどのもとごしよ

大田殿許御書

けんじ ねん けんじ ねん
建治2年('76) または同3年('77) の1月24日
がっ にち

さい さい
55歳 または 56歳
おおたじようみよう
大田乗明

しんしゆん ごけいが じた こうじん こうじん
新春の御慶賀、自他、幸甚、幸甚。

ぞくたい しんたい なか しようぶ せん
そもそも、俗諦・真諦の中には勝負をもつて詮となし、

せけん しゆつせ こうおつ さき
世間・出世とも甲乙をもつて先となすか。しかるに、諸経・

しよしゆう しようれつ さんごく しようにんとも ぞん りようちよう ぐん
諸宗の勝劣は、三国の聖人共にこれを存じ、両朝の群

けんおな し ほけきよう だいにちきよう てんだいしゆう
賢同じくこれを知るか。法華経と大日経と、天台宗と

しんごんしゆう しようれつ がっし にほん べん
真言宗との勝劣は、月支・日本にいまだこれを弁ぜず。

さいてん

とうど

あき

せん

てんだい

西天・東土にも明らめざるものか。

詮ずるところ、

天台・

でんぎよう

しようにん

こうじよう

ぜひ

けつ

めいてい

伝教のごとき聖人、公場において是非を決せず、明帝・

かんむ

こくしゆ

き

ゆえ

桓武のごとき国主、これを聞かざる故か。

ぜんむいさんぞうとう

ほけきよう

だいにちきよう

いわゆる、善無畏三蔵等は「法華經と大日經とは

りどうじしよう

とう

じかく

ちしようとう

ぎ

そん

こうぼうだいし

理同事勝」等。慈覚・智証等もこの義を存するか。弘法大師

ほけきよう

けこんきよう

くだ

とう

にぎ

とも

きようもん

は「法華經は華嚴經より下る」等。これらの二義、共に經文

おな

じぎ

そん

じかく

ちしようとう

にあらず、同じく自義を存するか。はたまた、慈覚・智証等、

ひよう

つく

そう

もう

したが

ちよくせんあ

き

表を作つてこれを奏す。申すに随つて勅宣有り。「聞く

しんごん

しかんりようきよう

しゆう

おな

だいご

ごう

ならく、真言・止観両教の宗、同じく醍醐と号し、とも

じんぴ しょう ないし たと い ひと りようもく とり
に深秘と称す」乃至「譬えて言わば、なお人の両目、鳥の

そうよく

とううんぬん

じゆうかい

ちよくせん あ

き

双翼のごときものなり」等云々。また重誠の勅宣有り。「聞

さんじよう

そうとうもつぱ

せんし

ぎ

たが

へんしゆう

こころ

くならず、山上の僧等専ら先師の義に違いて偏執の心

な

よふう

せんよう

くごう

こうりゆう

を成す。ほとんどもつて、余風を扇揚し旧業を興隆するこ

かえり

とううんぬん

とを顧みず」等云々。

よ

う

まつ

はじ

こ

がく

しよけん

お

う

余、生まれて末の初めに居し、学は諸賢の終わりに稟く。

じかく

ちしよう

しyouぎ

うえ

ちよくせんかたがた

あ

うたが

慈覚・智証の正義の上に勅宣方々これ有り。疑いあるべ

いちこん

い

からず、一言をも出だすべからず。しかりといえども、

えんにん

えんちん

りようだいし

せんし

でんぎようだいし

しyouぎ

こうりやく

円仁・円珍の両大師、先師・伝教大師の正義を劫略して

ちよくせん もう くだ うたが あ うえ ぶつかいのが がた

勅宣を申し下すの疑いこれ有る上、仏誠遁れ難し。した

ぼうこく いんねん ほうぼう げんしよ はじ

がつてまた、亡国の因縁、謗法の源初、これに始まるか。故

よ そし はばか よう ふよう し しんみよう す

に世の謗りを憚らず、用・不用を知らず、身命を捨てて

もう

これを申すなり。

うたが い ぜんむい こんごうち ふくう さんさんぞう こうぼう

疑つて云わく、善無畏・金剛智・不空の三三蔵、弘法・

じかく ちしよう さんだいし にきよう あいたい しょうれつ はん とき

慈覚・智証の三大師、二経を相對して勝劣を判ずるの時、

り どうじしよう けこんぎよう くだ とううんぬん

あるいは理同事勝、あるいは華嚴經より下る等云々。した

しょうけん ほうぶん あ しょうとく もち としひさ

がつてまた、聖賢の鳳文これ有り。諸徳これを用いて年久

ほか なんじ いちぎ そん しょうにん めいわく

し。この外に汝、一義を存して諸人をして迷惑せしめ、あ

てんか　じもく　おどろ

ぞうじようまん　もの

まつさえ天下の耳目を驚かす。あに増上慢の者にあらず

や、いかん。

こた　い　なんだち　ふしん

に　い　ろんじ　だいば

答えて曰わく、汝等が不審もつともなり。如意論師の提婆

ぼさつ　へいかい　ことば

か　じよう　い　とうえん

菩薩を炳誠せる言はこれなり。彼の状に云わく、『党援の

しゆ　たいぎ　きそ

ぐんめい　なか　しようろん　べん

衆と大義を競うことなく、群迷の中に正論を弁ずることな

い　お　し　うんぬん　ごふしん　あ

かれ』と言い畢わつて死す」云々。御不審これに当たるか。

ぶつせそん　ほけきよう　えんぜつ　いつきよう

しかりといえども、仏世尊は法華経を演説するに、一経の

うち　に　ど　る　つう　あ　かさ　いつきよう　と　ほけきよう　る

内に二度の流通これ有り。重ねて一経を説いて法華経を流

つう　ねはんぎよう　い　ぜんびく　ほう　やぶ　もの　み

通す。涅槃経に云わく「もし善比丘あつて、法を壊る者を見

て、置いて、呵責し驅遣し挙処せずんば、お かしやく くけん こしよ まさ し当に知るべし、

この人は仏法の中の怨なり」等云々。ひと ぶつぼう なか あだ どううんぬん

善無畏・金剛智の両三蔵、慈覺・智証の二大師、大日の
ぜんむい こんごうち りようさんぞう じかく ちしよう にだいし だいにち

権經をもつて法華の実經を破壊せり。しかるに、日蓮、世
ごんきよう ほつけ じつきよう はえ にちれん よ

を恐れてこれを言わずんば、おそ い ぶつてき仏敵とならんか。したがって、

章安大師、末代の学者を諫曉して云わく「しょうあんだいし まつだい がくしゃ かんぎよう い ぶつぼう えらん仏法を壊乱する

は、ぶつぼう なか あだ じな いつわ した か仏法の中の怨なり。慈無くして詐り親しむは、これ彼の

人の怨なり。能く糾治せんは、ひと あだ よ きゆうじ すなわ かれ おや どううんぬん即ちこれ彼が親なり」等云々。

余はこの釈を見て肝に染むるが故に、よ しゃく み きも そ ゆえ しんみよう す身命を捨ててこれ

きゆうめい

だいばぼさつ

ふほうぞう

だいじゅうし

ししそんじゃ

を糾明するなり。

提婆菩薩は付法蔵の第十四、師子尊者は

にじゅうご

あ

いのち

うしな

こうべ

は

二十五に当たる。

あるいは命を失い、あるいは頭を刎ね

とう

らる等これなり。

うたが

い

きようぎよう

じさん

しよきようつね

なら

疑って云わく、

経々の自讃は諸経常の習いなり。い

こんこうみようきよう

い

しよきよう

おう

みつこんぎよう

わゆる、金光明経に云わく「諸経の王なり」、密厳経に

いつさいきよう

なか

すぐ

そしつじきよう

い

さんぶ

なか

「一切経の中に勝れたり」、蘇悉地経に云わく「三部の中に

きよう

おう

ほけきよう

い

しよきよう

おいて、この経を王となす」、法華経に云わく「これ諸経

おう

とううんぬん

しえ

ぼさつ

りようごく

さんぞう

の王なり」等云々。したがって、四依の菩薩、両国の三蔵

もかくのごとし、いかん。

こた い たいこく しょうこく だいおう しょうおう たいか しょうか
答えて曰わく、大国・小国、大王・小王、大家・小家、

そんしゅ こうき おのおのぶんざい あ

くにぐに ばんみん

尊主・高貴、各々分齊有り。しかりといえども、国々の万民、

みなだいおう ごう おな てんし しょう せん ろん

皆大王と号し、同じく天子と称す。詮をもつてこれを論ず

ぼんのう だいおう ほけきょう てんし しょう

れば、梵王を大王となし、法華経をもつて天子と称するな

り。

もと い しょう

求めて云わく、その証いかん。

こた い こんこうみょうきょう しょうきょう おう

答えて曰わく、金光明経の「これ諸経の王なり」の文

ぼんしやく しょうきょう あいたい みつごんぎょう いつさいきょう なか すぐ

は、梵釈の諸経に相對し、密嚴経の「一切経の中に勝れ

もん つぎかみ じゅうじきょう けごんぎょう しょうまんぎょうとう あ

たり」の文は、次上に十地経・華嚴経・勝鬘経等を挙げ

かれがれ きょうぎよう あいたい

いつさいきよう なか すぐ

て、彼々の経々に相對して、「一切經の中に勝れたり」

うんぬん そしつじきよう もん げんもん

み さんぶ なか

云々。蘇悉地經の文は、現文これを見るに、「三部の中にお

おう とううんぬん そしつじきよう だいにちきよう

こんごうちようきよう

いて、王となす」等云々。蘇悉地經は大日經・金剛頂經

あいたい おう うんぬん

ぜんむいとう

に相對して「王」云々。しかるに、善無畏等、あるいは「理

どうじしよう

けこん くだ とううんぬん

びやくもん

同事勝」、あるいは「華嚴より下る」等云々。これらの僻文

ほたるび にちがつ どう たいかい こうが い

は、螢火を日月に同じ、大海を江河に入るるか。

うたが い きょうぎよう しょうれつ

ろん なに

疑つて云わく、経々の勝劣、これを論じて何かせん。

こた い ほけきよう だいしち い よ きやうてん

答えて曰わく、法華經の第七に云わく「能くこの經典を

じゆじ もの 受持することあらん者もまたかくのごとく、一切衆生の中

だいいち

とううんぬん

きよう

やくおうほん

において、またこれ第一なり」等云々。この経の薬王品に、

じゆうゆ

あ

いこんとう

いつさいきよう

ちようか

うんぬん

だいはち

たと

十喻を挙げて、已今当の一切経に超過す云々。第八の譬え、

か

かみ もん

あ

せん

ぶつ い

きよう

兼ねて上の文に有り。詮ずるところ、仏意のごとくんば、経

しょうれつ

せん

ほけきよう

ぎようじや

いつさい

しよにん

の勝劣を詮とするにあらず、法華経の行者は一切の諸人に

すぐ

よし

と

だいにちきようとう

ぎようじや

しよせん

勝れたるの由これを説く。大日経等の行者は諸山・

しゆしやう

こうが

しよみん

ほけきよう

ぎようじや

しゆみせん

にちがつ

たいかい

衆星・江河・諸民なり。法華経の行者は須弥山・日月・大海

とう

いま

よ

ほけきよう

けいべつ

つち

等なり。しかるに、今の世は、法華経を輕蔑すること土の

たみ

しんごん

びやくにんとう

ちようすう

こくし

ごとし、民のごとし。真言の僻人等を重崇して国師とな

こがね

おう

ぞうじようまん

もの

すこと金のごとし、王のごとし。これによつて増上慢の者

こくちゆう じゆうまん

せいてんいか

こうちようげつ

いた

しずくあつ

国中に充滿す。青天瞋りをなし、黄地妖孽を至す。涓聚

ようせん やぶ

たみ うれ つ

くに ほろ

まつて墉塹を破るがごとく、民の愁い積もつて国を亡ぼす

とう

等これなり。

と い

ないげ

しよしゃく

なか

ためし

問うて云わく、内外の所積の中に、かくのとき例こ

あ

れ有りや。

こた

い

ししん

ごきよう

たいそう

たてまつ

ひよう

答えて曰わく、史臣・呉兢の太宗に上る表に「ひそか

おも

たいそうぶんぶこうてい

せいか

こうこ

もと

に惟んみれば、太宗文武皇帝の政化、曠古よりして求むる

さか

あ

とうぎよう

ぐしゆん

に、いまだかくのごときの盛んなるもの有らず。唐堯、虞舜、

か

う

いん

とう

しゆう

ぶん

ぶ

かん

ぶん

けい

みな

夏の禹、殷の湯、周の文・武、漢の文・景といえども、皆い

およ

うんぬん

いま

ひよう

み

たいそう

まだ速ばざるところなり」

云々。

今この表を見れば、

太宗

まん

おう

い

せいどう

しみようせんせい

こ

ほ

を慢ぜる王と云うべきか。

政道の至妙先聖に超えて讃むる

しょうあんだいし

てんだい

ほ

い

てんじく

だいろん

ところなり。

章安大師、

天台を讃めて云わく「

天竺の大論

たぐ

しんたん

にんし

なん

わずら

すら、なおその類いにあらず。

真丹の人師、

何ぞ労わしく

かた

およ

こよう

ほつそう

語るに及ばん。これは誇耀にあらず。

法相のしからしむる

とううんぬん

じゅうぎほつし

かさ

ほ

い

りゅうじゆ

てん

のみ」等云々。

従義法師、重ねて讃めて云わく「

竜樹・天

じん

てんだい

でんぎようだいし

じさん

い

てんだい

親、いまだ天台にしかず」。

伝教大師、自讃して云わく「天台

ほつけしゆう

しよしゆう

すぐ

しよえ

きよう

よ

ゆえ

法華宗の諸宗に勝るることは、所依の経に拠るが故に、

じさんきた

こいねが

うち

くんし

きよう

たず

しゆう

自讃毀他ならず。

庶わくは、有智の君子、経を尋ねて宗

を定めよ」云々。また云わく「能く法華を持つ者もまた衆生
の中に第一なり。すでに仏説に拠る。あに自歎ならんや」
云々。

今、愚見をもつてこれを勘うるに、善無畏・弘法・慈覚・

智証等は皆、仏意に違うのみにあらず、あるいは法の盗人、

あるいは伝教大師に逆らえる僻人なり。故に、あるいは

閻魔王の責めを蒙り、あるいは墓墳無く、あるいは事を

入定に寄せ、あるいは度々大火・大兵に値えり。「権者は

恥辱を死骸に与えず」の本文に違するか。

疑うたがつて云いわく、六宗ろくしゅうのごとく真言しんごんの一宗いつしゅうも天台てんだいに落ちお

たる状じょう、これ有ありや。

答こたう。記きの十じゅうの末まつにこれを載のせたり。したがつて、伝教でんぎよう

大師だいし、依憑集えびようしゅうを造つくつてこれを集あつむ。眼有まなこあらん者は開もいて

これを見みよ。冀ねがわしきかな、末代まつだいの学者がくしや、妙楽・伝教にようらく でんぎようの

聖言しょうごんに随したがつて、善無畏・慈覚ぜんむい じかくの凡言ぼんごんを用もちいることなかれ。

予よが門家等もんけとう、深ふかくこの由よしを存そんせよ。今生こんじように人ひとを恐おそれて、後生ごしよう

に悪果あつかを招まねくことなかれ。恐惶謹言きようこうきんげん。

しょうがつにじゅうよつか

正月二十四日

にちれん かおう

日蓮 花押

おおたきんごにゆうどうどの
大田金吾入道殿